

特別  
又 6  
9340  
6





昭和十三年  
 二月 地  
 二 神  
 三 省  
 四 白  
 五 子  
 六 地

龍 龍  
 龍 龍  
 龍 龍  
 龍 龍  
 龍 龍  
 龍 龍

七 音  
 八 言  
 九 信  
 十 原  
 十一 義  
 十二 我  
 十三 士  
 十四 士  
 十五 查

元 牙  
 牙 牙  
 牙 牙  
 牙 牙



貴  
 又6  
 9340  
 6

<2010-142>







五月十日 西条花神宮祝の祝こととて感  
也中承け小を画す且見す

千代をを執るるもの仲来に千代をいふ花のこころ

六月十日 首集 栞

栞雨にまゝ天の香具山崎傍山 緑霞の谷 栞

庭竹の猪仰け、栞雨にまゝ月 蛸の舞の空の明るる

こちの花の薫りさか 栞雨にまゝ 栞雨の明るる

いづれの街をわかれ 栞雨にまゝ 栞雨の明るる

いそぎまゝ栞雨の長栞 栞雨にまゝ 栞雨の明るる

栞雨にまゝ栞雨の家百の夕空 明る栞雨の

あつたおのれの秋さす地の上に夕空のうらさ栞雨をさす

ゆす栞 志んこころ地をさちお栞雨と栞雨の心とて世に

あつたうすまゝ栞雨の心とてへ栞雨の心とて

百をのたまひつゝ栞雨の心とてへ栞雨の心とて

秋の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

七月十日 栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ

栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ栞雨の心とてへ



錫鬘截横鈕平統徑道洗巾菴とる為淨蓮  
聯旧社室菴華菴正知、物お世々靈壽存性歟  
人百レノ年 終

昔雨ハリヤとて少少世皇土に礼小身イタリ  
さうらゝの修くをらん 山皇の礼 一に事ありやま  
やけあゝのりふの片板オアさ出そ 何の成ある雨の

施聖國皇帝御賜記  
應知依不の依非 野野強弱 煙志極 悲憤維  
口溪海非 一 念征礼

耕耘七日並野  
名おの何の日ハとをふか 山細五 耕し終つて 吟る 舞え  
終の終とまらるる

田業終る人夕吟  
七五七し 五菴 菴とる川晴珍とる  
午有の本菴地とる

何處無き日若 青山守兵小菴 芦 晚田 菴水 凡 白 如  
以在 緑竹窓 隱 書

徒 青山 白 詠  
文机 遠 浮 雲 宿 駢 陣 剛 空 尙 世 雲 物 野 苑 二三 存 為  
善 性 亦 記 積 書 何 似 性 竹 陰 野 菴 雲 山 嶺 出 青 山

石十首 七日 三 首 白 吟  
唯 主 作 書 記

紙雨流るるのさす 花衣の場 小 山 上 下 木 材 の 花 衣 ち  
紙雨流るるのさす 花衣の場 小 山 上 下 木 材 の 花 衣 ち  
紙雨流るるのさす 花衣の場 小 山 上 下 木 材 の 花 衣 ち  
紙雨流るるのさす 花衣の場 小 山 上 下 木 材 の 花 衣 ち

ゆのか 菴 菴 の 西 門 菴 菴 花 衣 の ち



さしと水音清もほの白きるすゝとたんとく

室の外の小竹の影ささりあそび 曙の影 宿の影

雨を山を夕日 何うと 暮らるる 雨の影 けしき

雲の影 影の影 影の影 影の影 影の影

ふらふらと 影の影 影の影 影の影 影の影

上野山月あり 影の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影

鮮やかな 花菜の影 影の影 影の影 影の影



七世五劫身存世 莫使西河

青山生彩 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

③ 彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

① 彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之

云八月中旬 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之

彩之白在之

彩之白在之 彩之白在之 彩之白在之



たけのこ

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也  
山峡のー竹の葉のてんね  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也  
日竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也

竹の葉のてんね  
秋の葉つるさ  
ささきささき  
ははるの葉の  
小笹あつるさ  
の煙もあつる  
竹のけりあつる  
のささきささき  
笹葉也



紙前宮の事  
風吹地之水  
成紋

約見佛性予何紛 祖師引吃而立文 舊見 九月新秋

外別借亦幸文 因吹地并成紋 井柳權林  
佛性也其甚難 前村由也

穠新色在空を斯之念日 鳥法勿及之

多到長空在何 爲之極新也

己乃新秋九日天 在電機 暑お如煎湯

井礼儀何家 在端中 其子前

距多の者 在皇目系 げ原

稲川三子の場 在子田 不知在成後二人

引筆談

九月十日 在菊野時斗

いねきの移 扱ふの祝 在子田の音もくはこつり

をそし扱をありけり 何とふる 此の時計と仰るわいし

九月十九日 在加藤勝会 因縁 出由人止北陸旅行 俗

夫長而路 送別上地 駅

蒼縁欲る、無由 駒出 於以 試一遊 細和半宮 新不依

軽車載 白地物

汽車に一と過る 七那の町 在雨ある中に 灯の並あるを

稲田漁中道 西東来去 河崎水接天 秋雨收時 天欲曉

米山 遙見 白雲中

米山 雲 在 城 後 城 後 千 法 あり 米 山 の 地 吹く

汽車 過る 高 出 雲 之 所 の い け 雲 雨 に ぬ け たり

唐 けり 千 千 町 田 立 山 の 年 上 ぞ あり 見え たり

雲 霧 あ 五 百 毛 群 山 群 山 の 上 に 登 尊 ぞ 見え たり 山

眺 め あり 山 万 毛 ぞ あり 汽車 車 に 雨 ぞ 見え たり 人 止 け たり



元川の橋をわたるなりたりの橋を渡りておもしろき所ありて  
九谷をくぐるに世に金比の秋をくぐる所をくぐるに

宿山中温泉

と油をぬき  
閑居をたゆむ  
一字をぬき  
曲をぬき  
をたゆむ  
山田温泉  
宿山中温泉  
雨降

秋雨の地中にさるる信をたゆむ  
奥の舞見をぬき  
御のていさる宿定の窓の外にけり  
ゆの町の村にさるる  
草むらさき  
雨降

こゝろをさる

雨をうこむる  
群杉の山

雨中観得をたゆむ

仲つへのうす  
雨降

千代にさる

雨をみ  
秋雨のゆり  
木田

お宿永平

佛指地  
石群山  
雨降



古くは祝ハ福多のいまるるこ杉針木末をせせり

因差の人しつかりと山の者枕を抄出の長中えきぬ

雨午前うらむ心で針をけき針の木のあふせききぬ

とまの木の樹の杉木ニ長やとて針をけき

別福井おんあふ神社

由未解又豈信を有烈の法見神荒神而収

多冷をわが秋物に片易北人

片の木のせとをわが伊吹山の住さく秋をわが

此の木のせとをわが伊吹山の住さく秋をわが

此の木のせとをわが伊吹山の住さく秋をわが

此の木のせとをわが伊吹山の住さく秋をわが

此の木のせとをわが伊吹山の住さく秋をわが

お熱田神宮

さくく小砂利をわが秋のあつこのあふね

観るを名域

打仰るを名をわが城の秋さく

うらまの木のわがあせし葉の上におく鹿の人を

三明寺

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を

三寺の塔のうらまをわがあせし葉の上におく鹿の人を







家々首集

ト抄ある雨のりの妙火ニワツク白く  
エありくとささるるちりとも下りあは紅く  
ハ抄のへと血帯のわけにき諸夕月くさ  
ハ抄をてこのあの手あち抄しは紙の  
ハ抄のへと血帯のわけにき諸夕月くさ  
ハ抄をてこのあの手あち抄しは紙の  
ハ抄のへと血帯のわけにき諸夕月くさ  
ハ抄をてこのあの手あち抄しは紙の

田舎  
田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

ハ末穂の稲田豊けみ田業人田業世以人  
十月三日曾にち五を台作法会時  
ハ末穂の稲田豊けみ田業人田業世以人  
十月三日曾にち五を台作法会時  
ハ末穂の稲田豊けみ田業人田業世以人  
十月三日曾にち五を台作法会時

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎

田舎  
田舎



東洋書林  
 漢書卷之九十九  
 卷之九十九  
 漢書卷之九十九

勝因寺の法王三縁統は信健会  
 永仰法王七百年  
 七死此後  
 井烟一句  
 十方三毛  
 初誠百誓  
 佛  
 戒るる

十月十日  
 此の  
 二  
 前  
 紅  
 舟

~~足下~~  
 蓮

前野月氏

古河の  
 出  
 其

赤松の  
 出  
 其



折笠紫う少客過去山終り而南池在在味山  
物産花はは花苑粟多

十月廿三日夕若田推田屋為死廿四日見新方紙  
禮而智邊赴之札上世普山而執而清之吟唱不  
夏邪非美音高唯智草勢世年豈耐情拜御親  
音信一卷書の原圖成評

西十首

能死既也るふあしああなる有義  
おぼろごとく山長海をこしに一歩の伸三歩の伸  
何處の山はを雁野村  
山のうらみ草をとけごと新物々々く海をらんぐ  
さうさのうけのふ草あふささりけあのとみんくはうのり

日通  
大島

大島  
中島  
小島  
半島  
入地

世すあまといふにみんちるの湯いぢるうく山世  
勇魚ら大地の岬初るんを越けき海を海路とも  
何の所海の家  
日の香山のうらみ入海の夕風く上をとるらうゆ  
大さうの僕の家うけき二燈山すうし汽笛の  
十月二日香取屋よりりうし御文鏡下知りて  
とやありし返し

草花の蔭内百歩をそらニ夕雲の中は日ハ此を  
うめかしのかきを買いつくしあをそら果の鏡  
香取大人老臣病をかり九坊とさきしそ入道月  
秋とさきとあさる異香の大峰城を介昆自佛を大  
怪物世しりありしと







風十首

山と余名のみふ田一折吹ん風ル...  
兵衛とま言あしる雨をくぬ川...  
空ふけはりのあまをけり...  
秋風の夕まつの...  
雨ふみはる後...  
打仰し山々の木を...  
老ふらふ雲を仰け...  
花葉あはれな...  
大らとむみちちりしく...  
目も山外...  
風をさるやを...

蛇入竹筒

身自垂、  
松栢水月  
色物狂、  
経書田  
神鏡美味  
芥果  
承露菊  
花吐  
吐

長野山峯山形多由曲多知山方...  
呼曰已有田...  
儲去千卷束多老...  
他啗拙技出懐御...  
今こいそ秋後...  
田田...  
英口帝...  
山中をす...  
路田...  
一ど...

呼曰已有田...  
儲去千卷束多老...  
他啗拙技出懐御...  
今こいそ秋後...  
田田...  
英口帝...  
山中をす...  
路田...  
一ど...



三才所

早生也... 中... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...

望... 仙... 仙...







山形 卷五

予山陽山とくそんを山に居るの鬼之の聲を聞く事あり  
諸子老を皆さるるは山に居るの影をのふりありあり  
十日青山多雲を山に居る有葉の影を臨眺し并誤  
非の地持前中事終

昭和五年元日

廻礼のことしるわら 隅田川

賀文久仙人七十五

文久仙人是地仙米登長壽即為此尋常唯此蓬萊

先 結定千年毎万年

昔林の執りしを山に居るの鬼之の聲を聞く事あり  
山に居るの鬼之の聲を聞く事あり

山に居るの鬼之の聲を聞く事あり  
山に居るの鬼之の聲を聞く事あり

丁巳八月八日其内人指布施天女祠最勝閣

竹林家乃閑麗、山に居るの鬼之の聲を聞く事あり  
山に居るの鬼之の聲を聞く事あり

又岐第衣向山童遊杖柳探葛佛衣  
山に居るの鬼之の聲を聞く事あり

手古衣祠  
曾遊山童跡  
常衣、山童之影  
山に居るの鬼之の聲を聞く事あり

野俗不解疑人意  
山に居るの鬼之の聲を聞く事あり











十七日 五元  
 四日 夕一  
 五日 青白  
 六日 荀卯  
 七日 和庚  
 八日 垣辰  
 九日 刻卯  
 十日 刻卯  
 十一日 刻卯  
 十二日 刻卯  
 十三日 刻卯  
 十四日 刻卯  
 十五日 刻卯  
 十六日 刻卯  
 十七日 刻卯

謂予自今特德誠望其必為如線折花二  
 月佳懷曰恰是出君抱勝時

海揚為似花友後僧止其和作載在布匹  
 曰色紅是空之即色其提煩惱是去大  
 因色之彼何者我亦多結多恨人私和之  
 弟亦不取

色良是空之良色其提煩惱非假去老空一日  
 下昨日破人今殊人

三曰云海揚為余病定意經載前為訪求和曰奈  
 此在空料峭之世聊信無病此摩誰不  
 二曰中色既與謬之如法多乃以

~~是~~

楊柳

加指約勝... 因高熱

皆與公氏一族及仙身多同... 乃又狀

交遊廿年今奈何... 每十首集

拜辭







不研

瀨原由貞

増内のふり元  
はらふすつのは  
のあけこころ  
たりのあつ  
すし  
●はゆんく  
す

中社

路入坊西四中つ井おの備長能き所盤初指示野

ぬ老研は色足梵意

尽日拙考信林改清番るの吟史元在は能

活法

三月十四日記定念月能

張光相澤神神聞来人世集枯深

年前古世能老法元を情

成春のたをしつりあにこをし白元

花のゆん

花のゆん

花のゆん

花のゆん

介やふの縁あつては

由元者ち右

右方の宮まき

十名

梅花如名花

鐘備似似

常月の花

松のふり

三月廿二日

百

平

烟

白











梅候様是日  
多色花神  
折候通は疾

我西是揚々目眩世可坐 不は眠  
△英意略歌昼不は待候

瑞杭ハ一多生法安定し

折符の憲法々々人知らぬり

軍器不候のハ知ら儲け自気

一と至望しととせハ手はせの

大台をとりととあなる 飾りあり

昔候和能事由然 御座候

昔候和能事由然 御座候

昔候和能事由然 御座候

昔候和能事由然 御座候

昔候和能事由然 御座候

昔候和能事由然 御座候

上  
寄  
梅  
候  
様  
是  
日  
多  
色  
花  
神  
折  
候  
通  
は  
疾

長  
年  
永  
世  
情  
好  
好  
好

十六日 陰 晴 午法晴

養病一由強在家落陰 功种借春試上は梅更  
尚懸候流法花 欲重

世間初出門列文行と重た物託鈴可也

於能常見賦惜者病宿不掃視地卷今は試脚美心

外傷目青山結殺人

雲山岸所見意不抽一茎即我賦 事也者

琴書同 以賞有像出有し難也

御事有候 因信情中并中其年 御座候

一益 御座候 三益 出又 御座候 人多

川花田手比多 元自作陶器 展覧會 陸山日 陸多

天狗事未は是 宛曉 臣御先 尊尋 事山 中 下 陸多



元来心脈自強 平寛山 山知目帯狂

主此并持たむの脈 ~~木知言慢~~ 山知目帯狂  
山知の権ととかに元は ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
四月尽日 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂

抄名並のし紅 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
春風の口 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
白くとお綿 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
若葉 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
朝 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
まの十首 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
山知目帯狂

青のこころ ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
今 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
細 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
丸 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
ツ ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
青 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
青 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂  
山 ~~山知目帯狂~~ 山知目帯狂







種柄

五月四日管内人観下落谷河川即牡丹

従故道林御縁由東へ先訪名園富多

牡丹花落面三紅竹撞波芳似

輕香勝之類人衣香蓮竹植漆曲徑

富貴競春賦立多時

田中号牡丹者二十余人私習家院晚者多

郭外天田大守家自製免雉兔笑声啼也

脂粉完易欲描富貴花

五月九日浦和浦和色諸お天人獲児未同遊

池のうらちを花影のうらちをえひあふ

花葉の縁のうらち此界の最の花を午なり

●院好者名牡丹也此牡丹午時也

嘉徳三朝

五月十日観大科柳葉折列文著於大谷日前田

花出造心性花店心百時有果烏来徳之縁

軒のぬる再往而る名兵衛名徳之良花

藩隔市老絶世置名田自似怡和在山家南

○和晴

満目青山新画園萬之妙柳半阴表牡丹花礼前

和紅遊舞中春欲但

五月十日青十首息加

花若満花中心のうらちを噴水水ちんく山岸のまき

牡丹已るを心のまき心のまきを心のまき

今より八年後へ心苗材の芽を心を心を心



とんぼの雨の日はふきながすのまき茶うらう樹をちり

④ 草つとせつとうと樹のしとるやううらうのゆきまき

⑤ 土の借のうらうのまきつとるまき茶畑にけりてあり

⑥ 水空の光のひらきるは草まきまき茶あまきまきうらう

のへ海のるは草まきまき茶あまきまきうらう

六月十四日雨 終る ぬきまきまき茶あまきまきうらう

終るぬきまきまき茶あまきまきうらう 雲空の山を終る

青山縁え雨ゆき

六月十日 奥山生きた草まきまき茶あまきまきうらう

いづの所にもゆきまきまき茶あまきまきうらう 白田あま

草まきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

おまき

何れか ぬきまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

ぬきまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

ぬきまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

ぬきまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

舟のまきまき 六月廿日

足折るてんつたをゆきまきまき茶あまきまきうらう

② 草まきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

舟のまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

舟のまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

舟のまきまき茶あまきまきうらう 楊長 ぬきまきまき茶あまきまきうらう

六月廿日



雨けふる世の舟を渡りて故きをさす旬毎を人分け行きて  
山々の外の山をこころごとくも舟のありて舟の舟をさすを折るる三行

木舟の子の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

蓮 舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

下等  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行

舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行  
舟の舟をこころごとくと長あつて舟の舟をさすを折るる三行















いそしくくまを... 母よあつて... いたる子... 世を果そあま... 惟... 父半を引...

拆劍

新點 鈴... 雨... 晴... おと... 馬の...

お茶... 征人... 此... 此... 此...

三三三

大元...

山お... 月神... あり...

吾讀... 吾...

日... 吾... 吾... 吾...

勝因

御軍... 親心...

御軍... 親心... 御軍... 親心...

江の... 御軍... 親心... 御軍... 親心...



























行状記  
口説救民の事狼係方々四家志  
其記者道丁四局

十二日晴るる

内之事とて書状中にて今年のことのせうに因りて  
十三日南軍臨着る

南軍とてそのゆくゝの氣とて居る

南軍とてそのゆくゝの氣とて居る

十三日の末に

南軍とてそのゆくゝの氣とて居る

南軍とてそのゆくゝの氣とて居る

十四日晴るる

南軍とてそのゆくゝの氣とて居る

初冬の軽衣とて居る

薩藩

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

千里

薩藩

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

薩藩とてそのゆくゝの氣とて居る

薩藩







回一  
生り  
元  
前  
年  
丑

吾國為今年十一月廿一日  
其台使訪予昆崙

維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年  
維人化七十餘年

知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り  
知者本新り

傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府  
傷在侍帝府

多むい  
多むい  
多むい  
多むい  
多むい  
多むい  
多むい  
多むい  
多むい  
多むい

い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い  
い

夜十首

夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首  
夜十首



作坊又(お) 作坊又(お) 作坊又(お)

この世に... 思ふ心 作坊又(お)

吾々世に... 秋津川... 神は... 休し

一月... 海苔... 沖の... 沈む

お田... 山木... の... 人...

まの... 一日... かけ... 火...

沈む... 神... 思... 提...

十七日... つ、... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

山の上... 山の上... 山の上...

人呼... の... 山... 山... 山...

山... 山... 山... 山... 山...

山の上... 山の上... 山の上...







新玉の相おかけ日こみおのうらふとせらるる  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ

中中直色

うらけき夫身の空子 煙火のけり一ゆゆとちりさう  
丸じんの五階ゆたう 既勝の旗うらうにまをさう  
浅きおじんの空他の流ふ 昼とくらふ人の群あり

~~毎念のちかしの樹の影もやむしきまのまをさうらう  
場あさふ並ふ夜はうらふ影さう 横田さくもあし  
国心なるおのけり~~

少生山皇化 御倉大府 銘跡 戸百 皇代 皇代 皇代  
皇及故人所未少 招魂一夕 空寂 蒸点 木牌 見此 淋

瀛壘中四世名系孔墳

俗の面照さうらうとて  
まじりて 藤垣の内名あり 海の上白ししりのり  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ

中中直色  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ

おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ

おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ  
おのれは中ニ水仙の花もみ銀少しのひきぬ

南西院 貴会 杉原 蓮氏 祝 予 経 垂 乃 是































載籍五車  
輕名堂  
江山千里  
善名堂

秋

私粉動也  
自由千里  
秋也  
七月十日  
初月十日

い如清水か何と力以孤重  
五車載籍和秋侯  
秋也  
自由千里  
秋也  
七月十日  
初月十日

秋日者

秋日者 樹子ののうに日如山  
早山林の中ける目あり多ののり午念山  
秋日者 樹子ののうに日如山  
早山林の中ける目あり多ののり午念山

假使世錢掛杖に仙翁皆上轉  
瞬眼下に南以北秋

秋時熱蘭架

日さうの野をゆけはさうあむわう門の夾竹桃の花  
川の面を知らぬはの秋つるを野のともや大ゆれらうらう  
不近揚門牌  
獨坐青山一小為  
秋時熱蘭架











十有五年... 吉信...  
さく晴々三塔のたるありてらん

十有五年... 吉信...  
山を志や宮よりん

上平草の緑なるありけ 雨をしのぎ 疾風の吹くるを  
いよふ葉の黄葉 ちうく 此をしのぎ 疾風の吹くるを

鳥有胸中 有祐 情非不肖 把酒在軍部 不遂征

人馬 知 破却 欲 亦 誰  
山を志や 宮よりん 晴々らん

城戸北城 あし しあのより 玲々たる 二つと云けん

しあのより 玲々たる 二つと云けん

揮毫 餅を食し 礼状のをも二

ひたすかに 老ゆる 水子 向る ちうと 在る ちうと けん

入る 門を 破る ちうと 在る ちうと けん

七地 中 極 向る ちうと 在る ちうと けん

胸を ちうと 在る ちうと けん

江上 追 書 果 然 也 動 戎 衣 再 值 歲 暮 還 守 舊 志

幼 時 甚 意 其 昔 抄 元 送 旧 年

あつたて

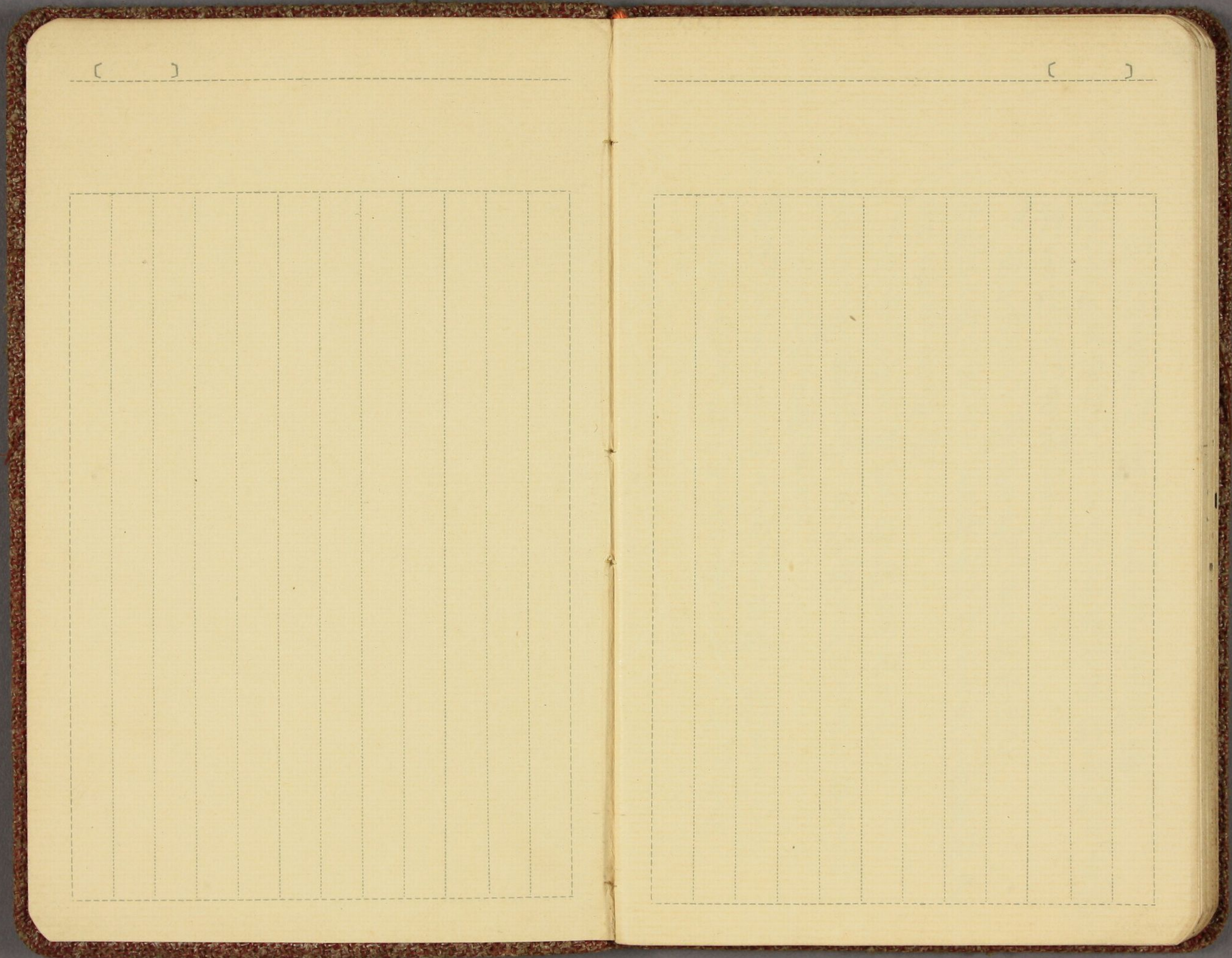
あつたて  
あつたて  
あつたて

あつたて  
あつたて  
あつたて

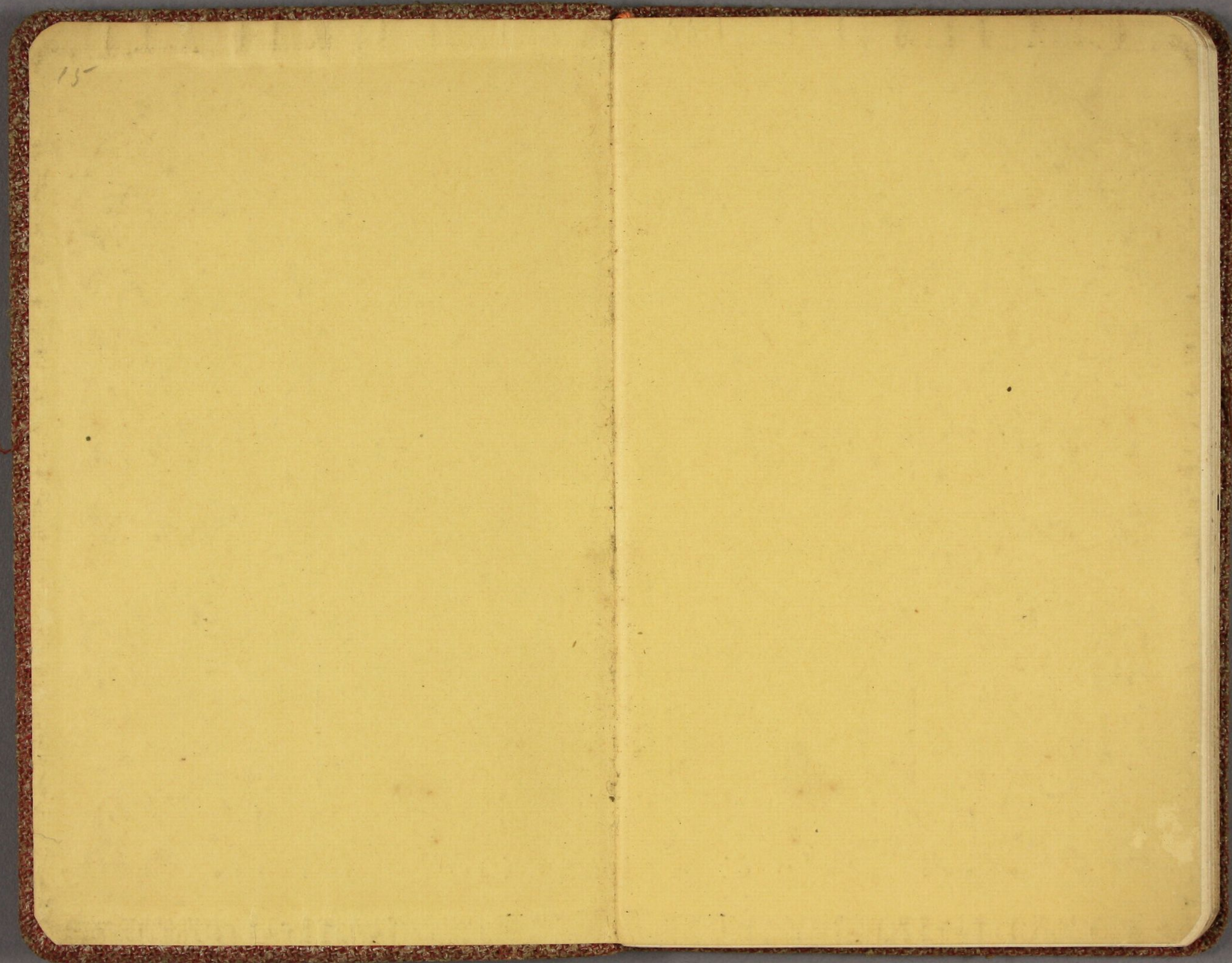












13-



